３．議題

（１）施設整備ビジョンのコンセプトについて

○長谷委員（施設整備委員長）より資料１を使って施設整備委員会の考え方を説明

2005 年から６年にかけて大学のあり方検討会をもった。その中で施設についても教員、学生等からいろいろな要求が出ていた。要求に対してきちんと整備をしてもらわないと法人化は受け入れられないと県の大学改革室と話をしてきた。その中で既存のキャンパスにある美術、音楽、管理棟の 35,000 ㎡が既存の平米数であるが、各学部から建物に対してほしい空間について、学生が増えたことによってアトリエを増やしたい、アトリエの基本的寸法が足りない、プレゼンテーションルームがない、工房数が学生数とあまりにも対応していないとの要望が積み上げ方式で出てきて、それを全部入れ込むと 50,000 ㎡に近くなる。ある程度押さえて 48,000 ㎡で依頼、交渉をしてきた流れがある。その平米数に対応した計画として構想案を出した。だからマスタープランではないし、マスタープランという言葉は一度も使っていない。この構想案では緑についての検討は全くしていない。ただ、それぞれの学部から教育に必要な希望平米数をすべて仮置きしただけのものであり、そういう意味での計画では全くないことをはっきり申し上げる。それぞれの建物も、単純に各学部の関係や希望を図化したコンセプト的な図であり、これをなぜマスタープラン思うのかが理解できていない。こちらからはあれを一度もマスタープランとして説明はしていない。そのことを認識してほしい。

大学は平成 19 年に法人化された時に、中期計画が必要となった。大学の在り方の方向性を目指すことにもなった。その中で国公立の５芸大の中で愛知芸大は何を目指すのかで始まったのがこのコンセプトである。（資料１）「オンリーワンの大学力」を一番のメインテーマとし、芸術の発信の仕方として「愛・知・芸術の森」というキーワード（キーワード説明は資料１）にして、愛・知は世界に直結する、芸術は本質を追求する、森は感性を育む。これを大学の方向性の中で施設だけではなくカリキュラムの問題であったり、大学がこれから行こうとする方向性をきちんとつけていく大きなコンセプトである。今回、新たなビジョンを行うのでコンセプトの見直しがあるのではないかという話を聞いたが、見直しの予定はない。大学の方向性は中期計画できちんと決めている。この方向性の中で、今検討いただいている施設のビジョンをどう対応させるかを私たちとしては考えている。吉村イズムの継承ということもきちんと言っているが、前回近藤委員から吉村イズムについて何の記述もないと言われた。それでは、今回の委員会に向けて吉村イズムを理解できるように紙で出してもらいたいと依頼した。しかし吉村イズムというのは文字にするものではないと言われたら、何をもって皆さんに吉村イズムをご案内するのかと思う。

芸大としては、吉村イズムとはこの素晴らしいキャンパスのランドスケープが一番のコンセプトであり、軸線に講義棟があり、両側に音楽学部棟、美術学部棟、それに対して永田代理もおっしゃった管理棟があって対面する学生会館、食堂とのの配置計画が吉村イズムを具体化していると思う。過去 40 年間の卒業生はその恩恵を受けながら教育を受けて旅立っていくわけで、彼らともランドスケープの素晴らしさでは一致している。だから建物の問題として我々としてはビジョンを作っていく。前からお話しをしているが修繕で対応できるものは修繕でやっていくのは基本的なコンセプトとして持っている。しかしマスタープランは全部改築となって